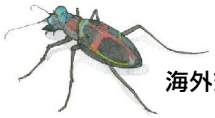
ビルマ語研究最前線



海外交流

井　上　さゆり*

From the Forefront of Burmese Studies

Key Words：Burmese language, Music, Tradition

1．ビルマ音楽研究

本稿のタイトルは「ビルマ語研究最前線」であるが、ビルマ語をベースとした研究のひとつとして、筆者自身の専門であるビルマ音楽研究の状況と、現地における音楽実践の状況についてここでは紹介していきたい。

ミャンマー音楽の研究者は現在アメリカ、ドイツ、台湾、日本など各国にいる。1950～60年代にかけて数名のアメリカの民族音楽学者が複数の論文を発表した後はミャンマーへの外国人の入国が難しくなり、海外の研究者による研究はしばらく途絶えた。80年代より再び研究が増え、90年代に入ると若手の研究者が現れるようになった。当初は音楽学的な研究が多かったが、現在では音楽の実践や表象の仕方等についての人類学的な研究も増えている。少数民族の音楽や土着の精霊信仰の音楽、ポップミュージックなど、研究対象も広がっている。ほとんどの研究者が現地語を習得している。筆者自身は古典歌謡の研究を、貝葉文書をはじめとする文献の分析を中心に、演奏実践も併せて行っている。音楽研究者は簡単に数え上げられるほどの人数しかいないが、研究者自身がパフォーマンスをするなど実践的に関わっていることが多く、この分野の研究の活気を作っているように思う。

とはいえ、ミャンマーに長年かかわっている人でも、伝統芸能を見たことがないという人も多い。政治や経済などに比べて、「役立つ」感じの少ない分野かもしれない。しかし、音楽研究は、多くの人々の営為によって支えられてきた文化の厚みと歴史を感じることができる点で重要な分野のひとつといえよう。古典歌謡の歌詞は文学としても位置付けられ文学史に記録されてきた。また、作り手には王族や王に使える役人が多く、歌詞内容は王を讃えたものが大部分で、歴史研究としても見ていくことができる。さらに、演奏などの実践を通して、自身で文化の構造や継承について体験的に理解することができる点も魅力的な分野である。

2．伝統芸能の位置づけ

伝統芸能は観光資源として利用されることが多く、ミャンマーも例外ではない。外国人宿泊客の多いホテルではロビーや食堂で、いわゆる伝統楽器の竪琴や竹琴を演奏している風景を90年代以降よく見かけるようになった。ホテルのレストランで舞踊や糸操り人形劇などを演じているところも多い。

伝統芸能を職業とする者は社会階層的にはあまり高く評価されないことがごく近年まで長い間続いた。プロ並みに音楽に親しみ演奏しつつ、これを職業とすることには抵抗を持つ年輩の愛好家も少なくない。しかし、60年代に国立の芸能学校が設立され、90年代に芸術系の国立大学が設立されることで、芸能の位置づけはやや変化した。ミャンマーが市場経済に移行した90年代より、政府が文化保護政策の一環として芸能を保護育成する様々なプロジェクトを開始して以降はさらに、芸能の位置づけは上がっている。実際、教養として子供に楽器や舞踊などを習わせる親が近年増えてきたことは、学歴社会で放課後は学習塾に通わせることが多く、習い事が一般的ではないミャンマーにおいて新しい傾向といえる。

* Sayuri INOUE
1972年生
東京外国語大学大学院地域文化研究科
博士後期課程修了（2007年）
現在、大阪大学大学院言語文化研究科
言語社会専攻　准教授　博士（学術）
ビルマ音楽、ビルマ文学
TEL：072-730-5285
E-mail：inoues@lang.osaka-u.ac.jp

3．人々にとっての伝統芸能

一昔前まで、日本人がビルマと聞いて連想するのは竹山道雄の小説『ビルマの竪琴』が多かったと思われる。サウンガウッと呼ばれる竪琴は、舟のような形をした胴体に婉曲した首がついた独特の形で、金やガラス細工できらびやかに装飾されている。この見かけの派手さとは逆に素朴な音色が特徴である。音色のみならず、その形の優雅さからも人々に好まれる楽器である。竪琴と並ぶ代表的な楽器がパッタラーと呼ばれる竹製の木琴で、こちらの音色も素朴で耳に心地よい。比較的音量の小さい竪琴や竹琴は、主に室内で歌い手の歌とともに演奏される。

歌い手と竪琴演奏

サインワインと呼ばれる環状に並べた太鼓を中心に構成されるサインワイン楽団もまたビルマ音楽の代表的な楽器である。サインワインを始めとする数種類の太鼓や銅鼓と、フネーと呼ばれるチャルメラのけたたましい音で奏される大音量の賑やかな演奏が特徴的である。サインワイン楽団は芝居、糸操り人形劇と共に演奏する他、祭事で演奏されることが多い。祭事では巨大なスピーカーを設置してさらに音量を上げ、歌手もマイクで加わる。最も出番が多いのは、子供の得度式に伴ってその前夜に開催されるエンターテイメントショーでの演奏である。大がかりな得度式では、親がお布施の一環として近所の広場に屋根を擁した小屋と舞台をしつらえ、主役のサインワイン楽団の他に、著名な歌手や俳優を呼び寄せて、近所の人々を夜通し楽しませる。簡単な麺類をふるまうだけのシンプルな得度式もあるが、数百万円規模でお金をかけたこのような大規模な得度式も珍しくない。雨季の明けた10月頃から5月頃まで、ほぼ毎晩のように得度式に呼ばれて演奏に出かけるサインワイン楽団もある。

筆者は現在、旧王都のマンダレーでの調査を中心としている。マンダレーには数多くのサインワイン楽団があり、有名な楽団は全国各地に演奏に呼ばれて出かける。夜7時頃から夜中の1時、2時まで演奏を繰り広げ、明け方に少し休んだ後、翌日早朝から昼過ぎまで、得度式とその後招待客にふるまわれる食事が済むまで演奏を続ける。夜の演奏はコメディアンとの掛け合いで繰り広げられ、床にぎっしり座っている聴衆を大笑いさせながら進行する。

4．伝統的なものとそうでないもの

サインワイン楽団は、見た目はいかにも伝統的な楽器から成る楽団であるが、演奏される曲は数曲の古典歌謡以外は、団長が毎年新たに作る新曲を中心に、懐メロ、流行りのポップスなどである。また、電子キーボードやドラムスも加わって演奏している楽団もある。団長作の新曲は祭事の施主の功徳を讃えるものとサインワイン奏者である団長の技術を讃えるものが主で、古典歌謡の旋律を一部用いながら新たな旋律を加えて作られることが多い。調律もビルマ音階ではなく、西洋音階に調律し直されて演奏されている。このように、「伝統」や「古典」とは単純に括れない実践を見てとることができる。ミャンマーの人々にとってサインワイン楽団は、生活からかけ離れた文化ではなく、ポピュラーな曲や新曲を演奏する身近な存在でもある。

一方で、その継承の仕方は伝統的といえる。曲や演奏法は師匠から弟子へ時間をかけて口承で伝えられ、完全に暗記する。最近では誰でも簡単に入手できるようになったスマートフォンに録音・録画して曲を覚えようとしている若者も見かけるようになったが、あくまでも記憶の補助のためであり、基本は師匠から弟子への直接の伝承となる。師匠が演奏して見せた箇所を弟子に真似をさせ少しずつマスターさせるという方法を取る。密接な師弟関係が生まれ、派閥が生じ、奏法や指使い、はては曲の旋律そのものにまで、違いが現れることがある。バリエーションの存在は、口頭伝承の大きな特徴のひとつであろう。

以前にはなかったパフォーマンスをいかにも伝統的に見える文脈で見かけることもある。例えば、マ

ンダレーにある有名なマハムニ・パゴダの境内では、朝夕決まった時間に鉄琴や銅鼓などからなる5名ほどの奏者が古典音楽の演奏を行っている。10年ほど前までは見られなかった光景である。また、僧院で多数の在家信者が、古典歌謡の旋律をそのまま用いて歌詞を仏教的な内容に書き換えた歌を合唱していることを知り驚いたが、これも新しい現象といえる。仏教歌という分野が新たに現れているのである。しかし、これらの実践は、初めて目にした人にとっては、いかにも伝統文化のように見えるであろう。

筆者自身は古典歌謡の研究を中心に行っており、演奏も古典歌謡の訓練を中心に受けてきたが、若い世代の歌い手や楽器奏者が古典歌謡をあまり演奏せず近現代の大衆歌謡を好んで演奏していることに最近になって気づいた。よりポピュラーな曲が好んで演奏されるのは自然なことであろう。筆者も自身の研究目的とは別に、演奏の場で対応できるよう大衆歌謡のレパートリーを一昨年くらいから増やし始めた次第である。演奏の基礎は古典で訓練されるが、聴衆が求めるのはよく知っている作品、流行の作品、新しい作品である。音楽研究者には、古典的な部分とそうでない部分、変化しないものと変化していくものを見極めて捉えていく視点が常に求められる。

サインワインの演奏を夜通し聴く人々